

追手門学院大学
心理学論集第26号抜刷
2018年3月31日発行

原 著

親の養育態度・期待が青年の対人恐怖心性に与える影響

胡麻田 竜 次
(追手門学院大学)

The influence of parent's attitude and expectations on youth's anthropobic tendency

Ryuji Komada
(*Otemon Gakuin University*)

親の養育態度・期待が青年の対人恐怖心性に与える影響

胡麻田 竜 次

(追手門学院大学)

The influence of parent's attitude and expectations on youth's anthropobic tendency

Ryuji Komada

(Otemon Gakuin University)

問 題

1. 対人恐怖について

人は誰でも不安を抱き、緊張するものである。たとえば「発表中自分はいままで話せているだろうか。」「あの人は自分のことを褒めだと思っていないだろうか。」「こういった感情を抱いたことがない人はあまりいないはずだ。このような不安は、一般的には一時だけのもので不安に思っていたことが終わった後は、緊張も解かれ落ち着きを取り戻すだろう。これは緊張状態の時に自律神経系の交感神経が優位となり、落ち着きを取り戻す状態には副交感神経が優位となるためである。しかし、不安障害の一種である社交不安障害 (Social Anxiety Disorder: 以下SAD) の全般型における不安はそういった場面に関係なく、不安が日常生活の大半を支配してしまう。つまり、交感神経が働いた状態が保たれ続けるのである。これが持続すると、心身共に疲弊してしまい、それを回避するためにひきこもりなど社会的にも不適応な状態に陥る可能性がある。症状別に見ると、人前で話すときに極度に緊張や不安を感じるスピーチ恐怖、顔面が緊張状態により赤くなる赤面恐怖、他者の視線を気にしすぎて本来の能力を発揮できなくなる視線恐怖などがある。2013年のDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition (以下DSM-5) でのSADの診断基準を一部抜粋すると、「他者の注視を浴びる可能性のある1つ以上の社交場面に對する、著しい恐怖または不安例として、社交的なや

りとり (例: 雑談すること, よく知らない人に会うこと), 見られること (例: 食べたり飲んだりすること), 他者の前でなんらかの動作をすること (例: 談話すること) が含まれる。” “その人は, ある振る舞いをするか, または不安症状を見せることが, 否定的な評価を受けることになると恐れている (すなわち, 恥をかいたり恥ずかしい思いをするだろう, 拒絶されたり, 他者の迷惑になるだろう)。” などが記述されている。

SADと診断されるまではいかなくとも, 人は場面ごとで少なからず不安を感じている。人前に立つのは嫌だと思っても, 最終的にはやり遂げることができた, という経験をしてきた人は多いであろう。また自分の居場所がない, なかなか集団に溶け込むことができない, 過度に気を使う, 知らない人と普段通りに話ができないといった悩みを感じている青年は多く, 上記のSADと類似した点を持ち, このような傾向の者を「対人恐怖心性」という (堀井・小川, 1996; 1997)。そして, この対人恐怖心性は健常青年において多く見られるものであり, 岡田 (1993) は, “対人恐怖の心性は, 単に病理的な状態という意味だけではなく, 青年期における自分自身への関心の高まりの結果であり, 健常な発達の側面としてみることができると考えている。

対人恐怖症の男女差に関して, 時代的な観点からは, “かつては圧倒的に男性に多く認められたが, いまではこの面でも男女平等に近づきつつあるというのが, 日本精神科医の一致した見解である” (内沼, 1990)。その点を踏まえて見てみると, 堀井・

小川（1996）の尺度の性差では、構造的には性差が認められなかったが、量的には6因子中3因子が有意な値であった。沖本（2001）は対人恐怖心性尺度に関して、大学生を対象に男女間の比較を行っている。その結果、こちらも構造的には有意な差が認められない下位尺度が多かった。以前は男性が圧倒的に多いと言われていた対人恐怖が、現在では内沼（1990）の述べたように、男女平等化が進んでいるのかもしれない。

2. 対人恐怖心性の原因

人が生まれて初めて関わるのはおそらく多くの場合、家族であろう。乳児にとって初めてのコミュニティであり、そこから対人スキルを形成していくこともできる。そうであるならば、親から子に向けられる感情、言動、認識などは子どもにとって非常に大きな影響を及ぼすであろう。さらに、これらが子にとって負担に感じるようなものであるならば、その子の将来の対人関係上に不安、緊張を生じさせるのではないだろうか。

対人恐怖症と親の養育態度の関連を検討する研究は、対人恐怖症者の幼児期以来の家庭環境について、過去に多くの報告がある。まず家庭にネガティブなイメージを抱いているという報告がある。三好（1970）は、“自身の経験例では親子関係（特に同性との関係）に問題があり、おおむねnegativeな感情を持っていた”と述べている。反対に、ポジティブなイメージを抱いているという報告もある。北西（2001）は“家族のあるメンバー（一般には母親であることが多い）との間に過剰ともいえる保護や期待によるつながり、あるいは情緒的關係を持っていたものが多い”と指摘している。

養育態度を測定する尺度として、小川（1991）は子どもから見た親の養育態度を測定するために Parental Bonding Instrument（以下PBI；両親の養育態度尺度）の日本語版を作成した。PBIとは、オーストラリアのParker, A.らが1979年に作成したものであり、養護因子（care factor：以降CA因子）と過保護因子（over-protection factor：以降OP因子）の2つにまとめられている。PBIではこれらの主要因子を、測定し、数量化するための子どもからみた親の養育態度の自覚的評価スケールである。これを小川が邦訳し、高校2年生の男女87名と看護短大1年生から3年生女子全員の136名との計223名（平均年齢18.7歳）を対象として実施した。その結果、高い信頼性と妥当性を確認している。さらに、小川（1993）はPBIを使用し、

不安神経症患者と両親の養育態度の関連を検討した。不安神経症患者26名（平均年齢19.1歳）にPBIを実施し、健常者との比較を行った。その結果、不安神経症患者が健常対象者に比べ、有意に両親のCA因子が低く、母親のOP因子を高く自覚していることが明らかとなった。

健常者の対人恐怖心性に影響を与える要因の一つとしても、山崎・吉野・木下・小野（2012）は親からの養育態度を挙げている。養育態度は対人恐怖症を引き起こすという先行研究から、健常者が抱く対人恐怖心性にも影響を及ぼすと考えた。また併せて対人恐怖の新たな型としてふれあい恐怖心性との関連も見ている。ふれあい恐怖とは従来型の対人恐怖が人と人が出会い顔見知りになる場面において発症しやすいのに対して、ふれあい恐怖では顔見知りからより親密な関係に発展する場面での困難が中心である（山田・安東・宮川・奥田，1987）。このふれあい恐怖に関しても健常な青年が抱く傾向があり、それを「ふれあい恐怖心性」という（岡田，2002）。山崎他（2012）は、大学生442名を対象として、対人恐怖心性尺度とふれあい恐怖心性尺度、PBIを用いて調査を行った。PBIの得点により大学生を4群（愛情のある強制群、至な子育て群、愛情のない支配群、怠慢な子育て群）に分類した。その結果、母親が過干渉（愛情のある強制・愛情のない支配群）であったと感じている人は、対人恐怖心性が強くなることを導き出した。

このように親の養育態度がその子どもの対人関係上の不安、緊張を高めることが明らかとなっている。しかし、親からの期待に焦点を当てて、対人恐怖に関する研究を行ったものはあまり見られない。子供が認知する親からの期待に関して内田（2014）は“多くの子どもは、親からの承認を求めて、その期待に応えようとする。しかし、そこには親との関係性やその発達段階、さらにはその期待の領域・内容によって、そのまま受けとめて期待に沿おうとするか、あるいはそれを負担と受けとめ、ストレスを感じるかは、子どもの認知により大きく異なってくる。つまり、《親の期待》の影響といった場合、そこには‘それを子ども自身がどのように受け止めているか’という、子どもの側からの認知の問題が大きく関係してくる”と述べている。

親の期待に関する先行研究は対人恐怖心性との関連ではないが、河村（2003）は親からの期待が完全主義傾向とどのように関連するかを検討し、自ら予備調査として親からの期待尺度を作成し、高校生308

名を対象に実施した。分析後、親からの期待が高いと完全主義傾向も高いという結果を得ている。また池田（2009）は大学生221名に対して、アイデンティティの感覚との関連からみた親の期待に対する反応様式の特徴を明らかにしている。これらは少なからず親の期待が子どもの性格傾向を形成しているものと捉えることができるだろう。この性格が形成されるということは、その人らしさが作られていくことであるため、最終的には他者に対してどのようにふるまうようになるかを想像することが可能になるのではないだろうか。そして、その人らしさにおいて不安傾向が強い人・弱い人などを生み出すはずである。

目 的

親の期待は、就職、進学、出世、人間関係、将来など捉え方によっては子ども自身の不安を高める可能性がある。これらを親から向けられることにより、子どもは親の期待通りの将来を歩まなければならないと思ってしまうかもしれない。そうなると不安は募り、養育態度と同様に対人不安を引き起こす要因となりうると考えられる。また、対人恐怖症と養育態度に関する研究は、鍋田（1997）のような臨床データの蓄積はあるものの、健常者を対象に実証的に調べた研究は少ない。

したがって、本研究の仮説は、養育態度が対人恐怖心性を高めることから、期待も同じようにプレッシャーに感じるうるものであると考え、対人恐怖心性に影響を与えるという仮説を立て、大学生を対象にこれまでの親の養育態度と期待が現時点での青年の対人恐怖心性へどのような影響を及ぼすかを検証し、同時に各尺度の性差を検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

大阪府内の私立大学の大学生1年生から4年生までを対象に質問紙調査を行った。回収数は302名（男性119名、女性183名）、平均年齢は19.98歳（ $SD = 1.22$ 歳）であった。無記入・データとして使用不可は32部であった。

2. 調査手続き

配布方法は個人配布を行った後に質問紙回収箱へ

の投函によって回収する方法と、授業時間に授業担当者に協力を依頼し、配布を行いその場で回収する方法を併用した。調査を依頼する際には、「コンピューターで統計的に処理し、データの管理には万全を期したため、プライバシーが外部に漏れることはないこと」、「感じたままを素直に答えてもらうこと」、「記入漏れがないように、全ての質問に回答してもらうこと」、「質問紙への回答をもって、調査協力に同意してもらいこと」、「調査の参加は強制ではないこと」を口頭で伝えた。

3. 質問紙の構成

(1) 対人恐怖心性に関する尺度

一般青年の対人恐怖心性を測定する尺度として、堀井・小川（1996, 1997）によって作成された対人恐怖心性尺度全30項目を使用した。「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。先行研究の因子は「Ⅰ. 自分や他人が気になる」「Ⅱ. 集団に溶け込めない」「Ⅲ. 社会的場面で当惑する」「Ⅳ. 目が気になる」「Ⅴ. 自分を統制できない」「Ⅵ. 生きることに疲れている」の6因子が使用されていた。

(2) 養育態度に関する尺度

回答者が感じていた両親の養育態度を測定するために、小川（1991）によって日本語翻訳されたPBI日本版を父親・母親についてそれぞれ25項目、全50項目を使用した。親の行動・態度から親との絆を評価するものである。PBIはその子どもが16歳までの両親の養育態度を回顧的に尋ねる尺度である。「まったく違う」から「非常にそうだ」までの4件法で回答を求めた。PBIは、小川（1991）がPBIの日本語版の信頼性・妥当性を見たところ、「CA因子」と「OP因子」の2因子であった。PBIに関しては、様々な先行研究では2因子で用いられているが、竹内・鈴木・北村（1989）は高校生およびその両親を対象とした調査において、PBIの因子分析の結果、2因子構造ではなく、「愛情」「干渉」「自由」の3因子が認められたことが報告されている。以上のことから、PBIの因子構造は未だ不安定であり、2因子とは限らないと言える。

(3) 親からの期待に関する尺度

回答者が認知する親からの期待を測定するために、河村（2003）の親からの期待尺度、全23項目を使用した。「全くそう思っていないと感じる」から「とて

もそう思っていると感じる」までの4件法で回答を求めた。河村(2003)の研究では、〈I. 進学学業期待〉〈II. 社会への適応期待〉〈III. 就業期待〉〈IV. 従順・見栄期待〉〈V. 苦労への報い期待〉の5因子で構成されていた。

結 果

1. 各尺度の因子分析と信頼性

(1) 対人恐怖心性についての因子分析の結果

さまざまな悩みや不満など対人恐怖に関する質問全30項目に対し、因子分析(最尤法, Promax回転)を行った。因子数はスクリープロットにより、6因子構造であると判断した。第1因子は、「人前に出るとオドオドしてしまう」「会議などの発言が困難である」などからなる9項目で、社会的な場面で通常のパフォーマンスが行えていないということで「社会的場面での当惑」($\alpha=.90$)とした。第2因子は「グループでの付き合いが苦手である」「仲間の中に溶け込めない」などからなる4項目で、集団に馴染めないことから「集団での不適応」($\alpha=.87$)とした。第3因子は「人と目を合わせていられない」「人と話をするとき、目をどこにもって行っていいかわからない」などからなる5項目で、視線に関する不安であることから「視線への過敏」($\alpha=.90$)とした。第4因子は「何をやってもうまくいかない」「自分が相手の人に嫌な感じを与えているように思ってしまう」などからなる8項目で、対人関係において疲れを感じさせることから「対人疲労感」($\alpha=.86$)とした。第5因子は「他人が自分をどう思っているのかとても不安になる」「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう」という2項目で、自分がどのように思われているのか、または他者が何を感じているのか、ということから「自他不安」($\alpha=.85$)とした。第6因子は「一つのこと集中できない」「根気がなく、何事にも長続きしない」という2項目であり、他者の存在が自分の集中力を減らすことから「集中力減衰」($\alpha=.68$)と名付けた(Table1)。

(2) 父親の養育態度についての因子分析の結果

小川(1991)の因子分析においては、CA因子とOP因子の2因子構造であったが、本研究での因子分析の結果から、2因子に絞り込むことは適切ではないと判断し、スクリープロットにより4因子とした。そこで、さまざまな態度や行動に関する質問全25項目に対し、因子分析(最尤法, Promax回転)を行っ

た。第1因子は「暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた」といった12項目であり、見守って、保護し世話する内容が多いことから「養護」($\alpha=.91$)とした。第2因子は「私が望むだけの自由を与えてくれた」などの6項目で、子どもへの自由を許す内容であることから、「自由」($\alpha=.82$)とした。第3因子は「私のすることはすべてコントロールしようとした」などの5項目であり、子どもに対して過干渉であることが多いことから「過干渉」($\alpha=.71$)とした。第4因子は「父親がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた。」などの2項目であり、親が心配しているが故に起こる感情を表す内容であったため「不安」($\alpha=.74$)とした。

(3) 母親の養育態度についての因子分析の結果

父親と同様に4因子構造で行う。質問全25項目に因子分析(最尤法, Promax回転)を行った。第1因子は「情緒的には私に冷たいように思えた」などの7項目であり、「否定」($\alpha=.87$)とした。第2因子は「望むだけ外出させてくれた」などの9項目であり、「自由」($\alpha=.83$)とした。第3項目は「よく私に微笑みかけた」などの3項目であり、「愛情」($\alpha=.85$)とした。第4因子は「私のすることはすべてコントロールしようとした」などの6項目であり、「過干渉」($\alpha=.80$)とした。父親と母親の養育態度の因子構造は異なっていたが、類似する点は多かった。

(4) 親の期待についての因子分析の結果

子どもが認知している親からの期待を聞いた質問全23項目に対し、因子分析(最尤法, Promax回転)を行った。因子数はスクリープロットにより、6因子構造と判断した。第1因子は「名の知れた大学へ行ってほしい」などの6項目であり、将来の進学先に期待する内容から「進学期待」($\alpha=.88$)とした。第2因子は「公務員などの安定した職業についてほしい」などの4項目であり、安定した業界に就職することを期待することから「就職期待」($\alpha=.76$)とした。第3因子は「子どもはくちごたえしないで素直に言うことを聞くものだ」などの4項目であり、親の言う通りにしておけば間違いのない、我慢できる存在であってほしいなどの「従順・見栄期待」($\alpha=.81$)とした。第4因子は「将来苦労しないように、今しっかりと勉強したほうがよい。」など学業に関する5項目であり、良い成績であることを期待することなどから「学業期待」($\alpha=.73$)とする。第5因子は

Table1 対人恐怖心性尺度の因子分析結果(最尤法, プロマックス回転)

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性
第1因子 社会的場面での当惑 ($\alpha=.90$)							
27. 引っ込み思案である。	.728	.216	-.005	.066	-.104	-.094	.672
3. 人前に出るとオドオドしてしまう。	.618	.173	.081	-.209	.112	.172	.666
23. 意思が弱い。	.573	-.250	.071	.159	-.034	.327	.542
15. 人がたくさん話しているところでは気恥ずかしくて話せない。	.561	.241	.119	-.044	-.055	.021	.585
21. 大ぜいの人のなかで向かい合って話すのが苦手である。	.548	.247	.160	-.027	-.033	.005	.648
17. 計画を立てても実行がともなわない。	.528	-.137	-.177	.070	.062	.283	.355
26. 人が大ぜいいると、うまく会話のなかに入っていけない。	.508	.405	.053	.032	-.034	-.103	.669
9. 会議などの発言が困難である。	.501	.248	.038	-.174	.143	.097	.543
29. すぐに気持ちがあくじける。	.481	-.153	-.088	.399	.035	.246	.633
第2因子 集団での不適応 ($\alpha=.87$)							
2. 集団の中に溶け込めない。	.035	.789	.046	-.130	.116	.002	.695
8. グループの付き合いが苦手である。	.131	.787	-.048	-.069	.034	-.088	.634
14. 仲間の中に溶け込めない。	-.074	.779	-.038	.134	.084	.020	.696
20. 人ととの交際が苦手である。	.222	.498	.125	.280	-.187	-.144	.615
第3因子 視線への過敏 ($\alpha=.90$)							
10. 人の目を見るのがとてもつらい。	-.035	-.028	.867	-.051	-.033	.199	.737
4. 人と目を合わせていられない。	-.088	.105	.807	-.135	.011	.262	.751
16. 人と話をするとき、目をどこにもついてもいまいちかわからない。	-.063	-.030	.807	.035	.076	-.030	.632
22. 顔をジッと見られるのがつらい。	.044	.010	.785	.040	-.020	-.045	.667
28. 向かい合って仕事をするとき、相手に顔を見られるのがつらい。	.183	-.039	.656	.119	-.029	-.176	.584
第4因子 対人疲労感 ($\alpha=.86$)							
24. いつも頭が重い。	-.057	-.152	.109	.785	-.039	-.126	.440
18. いつも疲れているような感じがする。	.030	.041	-.085	.682	-.023	-.065	.417
30. 何をやってもうまくいかない。	.210	-.036	-.068	.629	-.005	.195	.679
19. 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。	.052	-.045	.158	.596	.214	-.179	.542
12. 充実して生きている感じがしない。	-.244	.287	.038	.552	-.141	.371	.725
13. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているように思ってしまう。	-.039	.130	-.109	.514	.340	.027	.553
6. 生きていることに価値を見いだせない。	-.078	.205	-.015	.499	-.069	.317	.592
25. 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。	.011	-.107	.286	.335	.333	-.110	.433
第5因子 自他不安 ($\alpha=.85$)							
1. 他人が自分をどう思っているのかとても不安になる。	-.050	.051	.009	-.043	.911	.010	.796
7. 自分が人にどう見られているのかよく考えてしまう。	.064	.114	-.022	.038	.717	.072	.707
第6因子 集中力減衰 ($\alpha=.68$)							
5. 一つのことに集中できない。	.148	-.094	.114	-.137	.062	.684	.476
11. 根気がなく、何事にも長続きしない。	.221	-.034	-.004	.108	-.013	.492	.413
累積寄与率	40.556	49.749	54.820	59.776	64.640	68.259	
因子寄与	8.842	8.065	7.937	7.391	5.695	4.068	
因子相関	I	II	III	IV	V	VI	
I	—	.577	.614	.507	.580	.279	
II		—	.610	.494	.403	.340	
III			—	.381	.449	.230	
IV				—	.434	.533	
V					—	.194	
VI						—	

「誰にでも好かれる子どもになってほしい」などの2項目であり、社会的に受け入れられることを望むことから、「社会的受容期待」($\alpha=.78$)とする。そして、第6因子は「子どもが夜遅くまで勉強しているのに合わせて起きていることで、励みになってほしい」などの2項目であり、子どもの苦労に対する気遣いなどから、「苦労への報い期待」($\alpha=.80$)とした。

2. 各変数の平均、標準偏差および性差

対人恐怖心性の6下位尺度と父親・母親の養育態度を各4下位尺度、親の期待の6下位尺度の記述統

計量を求めた。その際、性差を検討するために各因子にt検定を行った。その結果、対人恐怖心性の下位尺度には有意差は認められなかった。父親の養育態度では、「不安」($t(300)=4.82, p<.01$)において、女性よりも男性の方が有意に高かった。母親の養育態度では、「否定」($t(300)=4.01, p<.01$)、「愛情」($t(300)=4.16, p<.01$)において、女性より男性の方が有意な差があり、「自由」($t(300)=3.43, p<.01$)、「過干渉」($t(300)=2.44, p<.05$)において、男性より女性の方が有意に高かった。親からの期待尺度の「進学期待」($t(300)=2.49, p<.05$)、「従順・見栄期待」($t(300)=3.12, p<.01$)、「学業期待」($t(300)$

Table2 尺度の平均値・標準偏差・性差

		平均 (SD)		t値	df
		男性 (N=119)	女性 (N=183)		
社会的場面での当惑		4.14 (1.36)	4.44 (1.28)	1.963	300
集団での不適応		4.18 (1.47)	4.23 (1.43)	0.333	300
視線への過敏		3.77 (1.51)	3.87 (1.54)	0.577	300
対人疲労感		3.85 (1.22)	3.97 (1.27)	0.827	300
自他不安		4.45 (1.69)	4.72 (1.51)	1.464	300
集中力減衰		3.82 (1.57)	3.73 (1.37)	0.520	300
父親	養護	0.18 (.621)	0.24 (.732)	0.757	300
	自由	2.91 (.646)	3.12 (.638)	1.391	300
	過干渉	2.04 (.660)	1.92 (.616)	1.569	300
	不安	1.79 (.769)	1.42 (.588)	4.818 **	300
母親	否定	1.29 (.717)	0.98 (.626)	4.011 **	300
	自由	2.80 (.641)	3.03 (.538)	3.429 **	300
	過干渉	3.10 (.704)	3.30 (.717)	2.438 *	300
	愛情	2.31 (.716)	1.98 (.637)	4.160 **	300
進学期待		2.68 (.766)	2.46 (.737)	2.493 *	300
就職期待		2.79 (.797)	2.71 (.650)	0.940	300
従順・見栄期待		2.37 (.742)	2.09 (.756)	3.119 **	300
学業期待		2.82 (.670)	2.62 (.590)	2.666 **	300
社会的受容期待		2.84 (.764)	2.90 (.764)	0.601	300
苦勞への報い期待		2.07 (.848)	1.91 (.840)	1.603	300

** $p < .01$, * $p < .05$

=2.67, $p < .01$)において、女性より男性の方が有意に高かった。その結果をTable2に示した。

3. 対人恐怖心性と養育態度・期待の相関

対人恐怖心性と養育態度・期待との関連を調べるためにPearsonの積率相関係数を求めた。その結果、対人恐怖心性の各下位変数では、第4因子の「対人疲労感」では有意な相関が多く、父親の「養護」、「過干渉」と母親の「否定」、「過干渉」、「愛情」と「進学期待」、「就職期待」、「従順・見栄期待」のそ

れぞれに5%水準と1%水準の有意な正の相関が見られた。父親の「自由」、母親の「自由」とが有意な負の相関が見られた (Table3)。また母親の「愛情」と「自他不安」、「集中力減衰」以外の対人恐怖心性尺度、各下位変数では有意な正の相関が見られた。

全体的に相関が低い結果であったが、「対人疲労感」に関しては、多くの因子との関連が見られた。このことから、自分が相手に嫌な思いをさせていたり、他者との関係において不安を抱くことと、養育態度は特に関連がある。また母親の「愛情」に関し

Table3 対人恐怖心性と養育態度・期待の相関

		従属変数						
対人恐怖心性尺度		社会的場面での当惑	集団での不適応	視線への過敏	対人疲労感	自他不安	集中力減衰	
父親	養護	.06	.02	.03	.07	.12*	.00	.03
	自由	-.05	-.03	-.03	-.07	-.15**	.07	-.04
	過干渉	.15**	.11	.11	.14*	.21**	.04	.10
	不安	.08	.07	.01	.11	.11	-.01	.11
母親	否定	.13*	.08	.14*	.18**	.25**	-.02	-.03
	自由	-.02	.03	-.06	-.07	-.14*	.07	.07
	過干渉	.03	.01	.04	.08	.16**	-.10	-.04
	愛情	.19**	.12*	.17**	.16**	.26**	.10	.06
進学期待		.03	-.03	.03	.01	.13*	.05	-.02
就職期待		.09	.11	.02	-.01	.22**	.14*	-.05
従順・見栄期待		.10	.04	.06	.05	.20**	.12*	-.01
学業期待		-.01	-.07	.01	-.03	.06	.12*	-.13*
社会的受容期待		-.03	-.03	-.10	-.10	.07	.09	-.07
苦勞への報い期待		-.16**	-.16**	-.20**	-.08	-.08	-.13*	-.07

** $p < .01$, * $p < .05$

ては、値は低いですが、対人恐怖心性の多くに関連があることが分かった。

4. 対人恐怖心性に与える影響の強さ

親の養育態度と期待が対人恐怖心性に及ぼす影響について検討するために、対人恐怖心性の総得点および各下位尺度を従属変数、PBIの下位尺度と親の期待尺度の下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、対人恐怖心性総得点および「集中力減衰」「視線への過敏」以外の各下位尺度において重回帰係数(R²)は1%水準で有意な正の値で

あった。「対人恐怖心性尺度」は「苦勞への報い期待」(β=-.21, p<.01)に負の有意な値が得られた(Table4)。このことから、親が協力的に接してくれるほど、対人恐怖心性を抱きにくくなると考えられる。また、親の期待の下位尺度である「苦勞への報い期待」に関しては、いずれも負の影響を与えていた。値は低いですが、少なからず影響を及ぼしていることが分かる。このことから、協力的な期待を受けている場合は対人恐怖心性を抱きにくくなると考えられる。

Table4 対人恐怖心性および下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析

		従属変数						
		対人恐怖心性尺度	社会的場面での当惑	集団での不適応	視線への過敏	対人疲労感	自他不安	集中力減衰
父親	養護	-.05	-.06	-.06	-.02	.02	-.09	-.02
	自由	-.01	-.03	.02	-.03	-.08	.13	-.07
	過干渉	.08	.06	.08	.06	.08	.04	.05
	不安	.04	.02	-.02	.05	-.01	.01	.10
母親	否定	.16	.14	.21 *	.21 *	.18 *	.08	-.08
	自由	.11	.14	.02	.01	.13	.10	.10
	過干渉	-.12	-.08	-.16	-.13	.01	-.14	-.02
	愛情	.13	.08	.12	.08	.11	.10	.10
進学期待	.01	-.09	.05	.04	-.01	-.09	.12	
就職期待	.12	.25 **	.02	-.01	.23 **	.11	-.02	
従順・見栄期待	.10	.08	.03	.00	.05	.21 *	.05	
学業期待	-.10	-.17 *	-.02	-.04	-.11	.04	-.19 *	
社会的受容期待	-.04	-.03	-.10	-.09	.03	.03	-.04	
苦勞への報い期待	-.21 **	-.19 **	-.22 **	-.10	-.17 **	-.18 **	-.10	
R ²		.11 **	.11 **	.11 **	.07	.16 **	.11 **	.07

** p < .01, * p < .05

考 察

本研究の目的は、親の養育態度が青年の対人恐怖心性に影響を与えることから、親からの期待にも同じように影響を及ぼすことについて検討することである。以下の結果に従い考察する。

1. 養育態度・期待の性差について

まず、養育態度の下位尺度の男女差を検討したところ、父親の「不安」因子のみが女性よりも男性が有意に高かった。これは、自分を父親に依存させようとしていたと感じるのは男性が多く、また父親からの助けがなければ、自分1人で物事をどう対処すれば良いか分からなくなる傾向があると言える。母親では、全て有意であった。「否定」・「愛情」は男性が高く、「自由」・「過干渉」は女性が高かった。このことから、男性は母親から自分は求められていない、

多くは話してこなかったなど関わりが少ないと感じている反面、時には暖かく、親しみを持って優しく接してくれていると感じることが女性より多い。一方、女性は自分が望むことをやらせてもらえて、自分自身で決断することができるが、少し過干渉であり、依存させようとしていたと感じていたようである。このように男性と女性は、両親の養育態度が異なることが本人にも認識出来ていることが分かる。

親の期待は、「進学期待」・「従順・見栄期待」・「学業期待」の3つが男性において有意に高いことが分かった。これは、女性よりも男性が、良い大学に進学することや勉学に励むこと、言うことを聞いて誇らしい存在になることを親から期待されていたことが分かる。男性は上記の3因子を強く認識していることから、親は自分の子どもが良い就職ができるかという「就職期待」、誰にでも好かれる子になってほしいという「社会的受容期待」、子どもの苦勞を労うといった「苦勞への報い期待」の3因子よりも、出

来れば学業に努めてほしい、親の言うことには逆らわれないでほしいといった期待を向けられているのだろう。

また河村（2003）の進学校の高校生を対象とした調査の結果では、女子生徒は男子生徒に比べ、就職期待を高く認知していることが報告されている。これは、女性の社会進出により、親が男性と互角にやっけていくことを望んでいることが原因と言われている。本研究では、就職期待が有意かどうかは判断出来なかった上に、男性の方が値は高かった。僅かな差なので明確には言えないが、未だに一家の大黒柱としての役割は男性にあり、親からもそうあるべきだと思われているのかもしれない。

2. 対人恐怖心の性差について

本研究における対人恐怖心の下位尺度の男女差を検討したところ、6因子全てに有意差が見られなかった（Table2）。対人恐怖心尺度を作成した堀井・小川（1996）の尺度の性差においても、構造的には性差が認められなかったが、量的には性差が認められる下位尺度が6因子中3因子あった。その中の2因子は、従来の対人恐怖症者に関する見解のように、男子が女子よりも強い。従来の対人恐怖症者に関する見解とは、内沼（1990）によると、“性差については、かつては男性に多くみられ、現在では男女平等に近付きつつある”といわれている。このことから、堀井・小川（1996）は、他の有意な差が見られなかった3因子の存在から、男女平等な傾向を示唆している。この考え方に則ると、本研究の対人恐怖心の性差が見られなかったということは、当時よりもさらに対人恐怖心では、男女の平等化が進んだと考えることができるだろう。

3. 養育態度と期待の関連・影響

相関分析の結果、全体的に相関が低いものとなった。そのため本研究においては、対人関係上で恐怖を抱くことと、養育態度や期待を向けられることは関連が低いと考えられる。先行研究である小川（1993）、山崎他（2012）によると、不安神経症者や対人恐怖心には両親の養護が低く、母親の過干渉的な接し方を自覚しているという結果があった。Table3の結果の中で、関連が高かったのは「対人疲労感」と母親の「過干渉」であった。対人恐怖心の下位尺度の1つだが、母親の過干渉的な関わりが多いと感じているほど、他者との関係の中で疲れを感じやすいと考えることができる。

しかし、本研究では統計的に有意な値はあったものの、相関係数は全体的に低い。まず対人恐怖心性と父親の「過干渉」・母親の「否定」・「愛情」、「苦勞への報い期待」と関連があった。これには、父親から過剰に心配されたり、母親とはあまり話すことがなかったり、愛情を持って親しみのある声で話しかけてもらうことなどと、対人関係上の不安は関係があると考えられる。また「対人疲労感」因子は有意な値が多く、特に養育態度に集中していることがわかる。以上より数値が低い、養育態度と期待は少なからず対人関係上の不安に関連していることを意味すると考えられる。

次に重回帰分析の結果、対人恐怖心尺度に養育態度と期待が与える影響も有意ではあったが、因果関係は低かった。その中で「苦勞への報い期待」因子のみが負の影響を及ぼしていた。自分が頑張ったことに対して、親が協力してくれていると思っていると、対人恐怖は感じなくなるという結果である。

対人恐怖心の下位尺度を見ていくと、まず「社会的場面での当惑」には「就職期待」・「学業期待」・「苦勞への報い期待」が影響を与えていた。これは、人前に立って話すことが困難になったり、普段通りのパフォーマンスが出来なくなるのは、親から安定した職業についてほしいなど、将来の就職先について期待されていることを認識した場合に、まだ学生で就職という将来の話であるため、自信にならないのではないかと思われる。反対に学業において自分のことで親が褒められていたり、成績上位者になってほしいという期待を向けられていると思うと、現在のことなので自信がついて社会的な場面で当惑しにくくなるようである。次に「集団での不適応」には、母親の「否定」・「苦勞への報い期待」が影響を与えていた。これは、集団の中に溶け込んだり、交際していくことが困難と感じるのは、母親と今まで関わりが少なく感じたことがある人に見られる。反対に溶け込むことに抵抗を感じなかったりするのは、親と一緒に頑張ろうとしてくれる時などであると考えられる。「視線への過敏」は母親の「否定」因子のみが影響を及ぼしていたことが分かった。人と目を合わせて話したり、見られ続けることに不安を感じるには、母親が冷たいという否定的な関わりが最も影響を与えていることがわかる。「対人疲労感」は、3因子が影響を及ぼしていた。母親の否定的な関わりや両親が良い就職を期待するような言動は、人との関係において、自分の顔つきが気になって関わり合うことで疲れを感じてしまう傾向にある

ようである。「自他不安」は2因子であった。これは、他の子どもと比較して自分の子どもの方が優れている、他人に誇れる肩書をもってほしいと期待していると、周囲が自分のことをどのように見ているのか過剰に気にしたり、深く考えてしまいやすくなる。最後の「集中力減衰」は、「学業期待」因子の1因子のみが影響を示した。学業などで、周囲に誇れるような人になってほしいという期待は、その人の集中力や根気を下げることはないと考えられる。

これらTable4の重回帰分析の結果を全体的に見ると、特に気になる点は「苦勞への報い期待」因子は総じて対人恐怖心性尺度とその下位尺度に負の影響を与えていたということである。「視線への過敏」・「集中力減衰」の2因子は有意な値ではなかったが、負の値であることには間違いはない。つまり、親が自分の子どもが頑張って、取り組んでいることに応えることは、その人の自信を生み出し、対人関係上においても自信を持って関わることができ、恐怖を抱かせないと考えられるだろう。今後は苦勞への報いという期待に関する内容に注目して、対人恐怖心性に影響を及ぼすか、または今回の結果のように対人不安を抱く原因ではなく、確実に自信につながるのかどうかを検証する必要があるだろう。また、養育態度・期待は「視線への過敏」「集中力減衰」という2因子を除いて、全てに有意な正の影響を与えていた。これは、少なからず養育態度・期待の両方が対人恐怖を抱く原因になっていると思われる。小川（1993）の先行研究では、不安神経症者は、母親の過保護因子が高かったと自覚しているという結果や、山崎他（2012）の研究での母親が過干渉であれば、その子どもは対人恐怖傾向を抱くという結果であったが、本研究では、有意な影響は見られなかった。本研究の過干渉因子は先行研究の過干渉因子とは因子分析での内容が異なっているため、比較が難しいが、現代の青年は母親からの過干渉な養育を受けると集団における関わり方には、特に影響は及ぼさなくなってきたようである。

本研究の仮説は、養育態度がその人の対人恐怖心性に影響を及ぼすように、親の期待も同様にプレッシャーに感じるものであると考え、対人恐怖心性に影響を与えるというものであった。しかし、今回の結果からは統計的に有意ではあるものの、数値がかなり低いものであり、確実に影響を与えているとは言い難いものであった。養育態度においても、先行研究のように強い相関や因果関係ではなく、非常に低いものであった。しかし仮説を裏付けるには、

妥当ではないかもしれないが、養育態度と同じ程度で期待も対人恐怖心性にわずかに影響を与えていることが分かった。

仮説を証明できなかった理由として、まず養育態度に関して、PBIは小川（1991）が指摘しているように、両親と子の関係という家族内環境の核となる部分だけを単純化して取り出して解釈していること、親からみた親子関係の評価という視点が欠けていることがあげられる。例えば、祖父母が親として自分を育ててくれている場合、両親以外に自分に大きな影響を与えるきょうだいなども考慮すべきだろう。期待に関しては、本研究では大学1年生から4年生を対象としたため、回答者によって、その時に向けられている期待が異なり、ばらつきがあったため、統一したデータが取れなかったことが原因と考えられる。

そして、今回使用した堀井・小川（1996, 1997）の「対人恐怖心性尺度」は、当時の時代背景のもとに青年が抱くと思われる内容の質問項目で構成されている。当時では信頼性・妥当性が認められており、これまでも多くの研究で使用されてきたが、現代では対人関係上で新たな不安が生まれているかもしれない。対人恐怖に関しては、現代の背景を考慮した尺度を今後作成するべきだと思われる。

4. 今後の課題

本研究の結果からは、期待が養育態度と同じように対人恐怖心性に影響を与えていたか証明することが出来ず、何点か限界点・課題が残った。まず、今回の調査対象者は青年の代表格である大学生に絞って調査を行った。ただ、考察でも述べたが、学年や年齢によって親からどのように期待されているかなど、大きく異なる可能性がある。特に「就職期待」は大学1年生と4年生でとらえ方も変わるだろう。他にも高校生に対して行った場合、大学生よりも親への依存が高いと思われるので、高校3年生は「進学期待」などが大学生とは異なる影響を及ぼすかもしれない。高校生、または大学を卒業して間もない人にもデータをとって、期待がどのように影響を与えていくか、比較して調査を行うことも今後は必要と思われる。

また、本研究のデータ数において、性差に偏りが見られた。対人恐怖心性のt検定の結果、男女差がなく平等化が進んだと捉えたが、女性のデータの方が多かったことから、統計において、何らかの影響をもたらしてしまったのではないかと考えられる。

この点を踏まえて、今後は男女均等にデータを集め、標本数に偏りがないようにすることを目指す。

引用文献

APA : American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition DSM-V*. Amer Psychiatric Pub.

(アメリカ精神医学会. 高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 pp.114-115)

堀井 俊章・小川 捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.

堀井 俊章・小川 捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.

池田 幸恭 (2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, 21, 1-16.

河村 照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究4, 101-110.

北西 憲二 (2001). 我執の病理 白揚社

三好 郁男 (1970). 対人恐怖症について「うぬぼれ」の精神病理 精神医学, 12 (5), 389-396.

鍋田 恭孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖 金剛出版

小川 雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, 6, 1193-1201.

小川 雅美 (1993). 不安神経症患者と両親の養育態度の関連 東京女子医科大学雑誌, 64 (5), 418-423.

岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.

岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10 (2), 69-84.

沖本 忠生 (2001). 自己愛の病理としての対人恐怖 - 発達の観点からの検討 臨床教育心理学研究, 1, 95-103.

竹内 美香・鈴木 忠治・北村 俊則 (1989). 両親の養育態度に関する因子分析的研究 周産期医学, 19 (6), 108-112.

内田 利広 (2014). 期待とあきらめの心理 親と子の関係をめぐる教育臨床 創元社

内沼 幸雄 (1990). 対人恐怖 講談社現代新書

山田 和夫・安東 恵美子・宮川 京子・奥田 良子 (1987).

問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報) ふれあい恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23 (2), 206-215.

山崎 久美子・吉野 真紀・木下 利彦・小野 純平 (2012). 大学生における対人恐怖的心性, ふれあい恐怖的心性と両親の養育態度について 心理臨床学研究 29 (6), 673-682.

謝 辞

本研究は、2017年度に追手門学院大学心理学部に提出した卒業論文を一部加筆修正したものです。本論文作成にあたり、多くの方にご指導とご協力を頂きましたことをここに謹んでお礼申し上げます。そしてご多忙にも関わらず丁寧にご指導、ご助言をして下さいました中村このゆ先生に深く感謝の意を申し上げます。